

# 令和4年度(2022年度)第1回北海道農業・農村振興審議会 議事概要

1 日時 令和4年(2022年)8月30日(火)13:25~16:02

2 場所 ホテルモントレエーデルホフ札幌 13階 ベルヴェデーレ

## 3 内容

### (1) 報告事項

○令和3年度農業・農村の動向等に関する年次報告の概要について

・資料1により説明

○生産資材価格高騰について、食料安全保障について

・資料2~5より説明

### 【委員からの主な意見等】

- ・令和3年、令和4年の肥料価格高騰を見ると、緊急対策を講じても、水田作経営の所得が下がってしまうのか。
- ・道総研の報告の中でも、北海道のほとんどの農地でリンや加里が過剰という報告があったが、肥料高騰対策の土壌分析等をどのように生産者に対して支援していくのか。

### (2) 意見聴取

○農林漁業における環境負荷低減事業活動の促進に関する北海道基本計画(素案)

・資料6-1~4により説明

### 【委員からの主な意見等】

- ・有機農業は、買ってくれるところを見つけることが大変。実際に有機野菜は、よく売れ残っていて、他の野菜より価格が高いからなのか、せっかく作っても売れない現状があるのも事実。その中で、有機をやってくださいと言われても切ない。
- ・「みどりの食料システム戦略」はとても良いこと。減肥・減農薬をしながらできるだけ収量を落とさない技術を開発してもらうことは、全農業者の望み。
- ・農薬と肥料を減らして有機農業にするとしたら、病気が出たとき、作物がとれなかったとき、誰が責任を取ってくれるのか。病気のついた米を、虫が食った米を誰が買うのか。
- ・温暖化によって、5割、3割と、収量が減って、病気が発生。この戦略の前に、確かな技術、栽培法を構築しなければ農家は死ぬ。勝手に目標にされるのは残念。
- ・この戦略は、残っていく子供達や環境のことを考えれば、進めなければならないと思うが、その前に、確かな生産技術を確立し、農家一軒一軒が理解しないと、この目標が達成できるのか疑問。
- ・北海道は食料基地であり、持続可能で安定供給して、環境にも良いことを具体的に示していったらと感じた。
- ・頑張って有機JAS認証を取った方が、地元直売所の有機農産物コーナーで販売しているが、きれいに売り切れる日は少ない。買い物に来るお客様は、地元の主婦や観光客の方。せっかく頑張って有機JAS認証を取って、直売所においても売れ残ってしまうのが現状。
- ・有機の肥料を扱っている肥料屋さん「認証が取れるのは2年後3年後になるかもしれないけど、売れる場所を必ず確保してから始めないと、骨折り損のくたびれ儲けになるよ」というので、こうした現状も踏まえながら、政策を進めてほしい。
- ・消費の部分について、北海道独自の表示制度がいっぱいあり、その中で、今後推進していく有機農業と、どのように差別・区別をしていくのか。
- ・安全・安心・おいしい北海道の農産物よりも値段が上がっていく有機野菜を、消費者がどう受け止めるのかが一番の課題。
- ・スーパーなどで有機野菜の種類がまだ少ない。トマトは有機で買えて大葉は普通のところから買わなければならない。
- ・フードマイレージを再度実行してはどうか。燃料や農産物の価格高騰から地産地消へ、輸送な

- どにかかるエネルギーを削減することができる。
- ・食材のロスが多い。買った物をきちんと消費するとか、レストランでも残さず食べるようなことをしっかりすることで、ゴミの削減や温室効果ガスの削減につながる。
  - ・安全・安心な食料を将来子どもたちに食べてもらえるように、いろいろ勉強していったらいい。
  - ・J A青年部で、子どもたちを畑に連れて行って、「こうやって収穫して皆さんのところに行っているんですよ」と、勉強したり、各学年ごとに「こうやって作っているから、皆さん食べてね」という勉強会を毎年している。
  - ・堆肥化処理施設で、牛のふん尿を集め発酵処理したものを畑にまいているが、街に近いほど、臭いの苦情が多い。有機をうたっているが、住民の理解が必要。
  - ・有機農家の勉強会に私たち消費者も参加している。
  - ・上士幌町では、家畜ふん尿のメタンガスを利用した電力供給、鹿追町では、公共施設に再エネルギー由来の電気を使い、家畜ふん尿由来の水素設備が整備されている。すごい技術であると感心。十勝は、森林も多いし、地域資源を生かしたCO2を削減する取組も結構行っている。
  - ・電気自動車をもっと推奨というが、十勝はシバレがキツく、途中で電気が切れてしまったら、雪に埋もれてしまったらどうするのかということを考える。道の駅にEVを充電する施設ができたり、少しずつ広まってきている。
  - ・遺伝子をゲノム編集された、病害虫に強い作物って、どんなリスクがあるのかわからない。遺伝子組換えは書いてあるが、ゲノム編集は書いていないので、人体に及ぼす影響はどうか、作物が交配によってどう変異していくのか知りたい。
  - ・アレルギー成分のあるものを切り取ったアレルギーのない作物が、目に見えないので、間違っただけで食べたらどうなるのか。
  - ・有機野菜を増やすことで、環境に配慮されることはすごく簡単そうですが、本当に有機野菜を増やすことや、簡単に生産者を増やせるのか。今まで取引があった本州の方と野菜がかぶっていて取引を中止にされたとか、販売ルートを探す苦労話を聞く。
  - ・病気がついたりとかを考えると、いくら環境に良いからといって有機野菜をどんどん増やしていきたいと思います。慣行農園の農薬とのトラブルも聞く。
  - ・最近、野菜だけではなく、商品全体で冷凍食品が増えてきている。北海道は生鮮な野菜が作られているのに冷凍は失礼な感じもするが、そうした消費の仕方もあるのかなと思う。
  - ・温室効果ガス削減に向けた取組について、道内の農業用水あるいは農業用施設を活用した小水力発電は、個別に可能性の検討が行われて、約10年以上が経ち、発電にこぎ着けたのが、当麻町、富良野市、清里町の3カ所。
  - ・全道的に小水力発電が広がっていくかということ、積雪寒冷である北海道では、冬期間の発電はほぼ不可能。送電網への接続の問題や維持管理コストの関係、売電収入の見通しなど、それぞれの地域で費用対効果などの課題が山積している状況と認識。
  - ・国において、小水力発電の導入は各種補助金も用意しているが、北海道において、これからどんどん広がっていくかということ、今の状況では厳しいと感じており、国は、思い切った支援が必要。
  - ・スマート農業の推進については、自動操舵トラクタやドローン、水田の水管理があげられるが、これらの取組を後押しするベースとなるのが、ほ場の大区画化やほ場の改良などの農業農村整備事業の推進。特に北海道は、全国に先駆けてスマート農業が加速的に進んでいることから、生産性向上とあわせて、温室効果ガスの削減にも大きな効果を発揮している農業農村整備事業の計画的な推進と、これらの効果について、国民に理解を更に広げていくことが必要。
  - ・最近特にZ世代とか、これからの担うアルファ世代の皆様はイミ消費とかエモ消費ということで、社会課題にどれだけ自分の消費が意味をなすのかを意識してる。SDGsの問題も含めて、これからの子供達に、どのような食を提供できるのかの観点から言えば、間違いなく、有機の商品だとかは、絶対必要になってくる。
  - ・とはいえ、高いよりは安い方が言いというような消費者の意識も必ず出てくるので、だからこそ、今回の取組は、特に、農業者の皆様には大きな負担となるので、農作物の収量の減少につ

- ながらないように、クリーン農業技術の進化とか、スマート農業の導入を更に加速化させて、是非、収量が下がらない、価格が今と変わらない、そんな形で提供できるような、ひいては、農業の担い手の負荷が少しでも軽減される方法を、セットで取り組んでいただければと思う。
- ・ほ場の大区画化について、メリットも大きいですが、デメリットとして、大区画化することによって、多くの重機が入ることにより、伐開とか、環境面ではデメリットも内包され、その対策をやって、二酸化炭素の削減の効果の方が大きいことで、はじめて環境負荷(削減)が達成できると思う。
  - ・行政の中で色々な政策を展開する際は、道民にとって何がプラスなのかが重要。その中に利害が対立するという事は当然出てくる。生きがい対策も必要。社会貢献も必要。ただ、経済で社会が回っているんで、経済的メリットはきちんと整理しないと納得しない。
  - ・いつまでにどこまでやるのかは難しいのかもしれないが、これをやることによって地域に生きている者にとってプラスだということをもう少しPRしていただければ、よりわかりやすいと感じた。
  - ・今回の中で、削減はなんとなくわかるが、農業として吸収って何かできないのかと感じた。
  - ・我々は現場で生きているので、この政策展開の時に、是非、現場の意見も聞いていただければ、ありがたい。
  - ・慣行農業で、化学肥料、化学農薬を削減していく考え方は、全くそのとおり。
  - ・昨今の気象変動は農業に対して非常に大きな影響を与えており、その辺の対応も考えていただきたい。
  - ・農林水産省のまとめた「有機農業に対する状況」で、有機農産物への消費者の認識は、「安全」というキーワードが第1位で72%。それに対し「環境に配慮した農法」という認識を第1番目に挙げた方は2.5%。この施策と一般消費者の認識がずれているところが一番問題であるのではないかと。消費者の意向を促すような取組も是非進めていただきたい。
  - ・欧米では、有機農業の面積の中で、草地の占める割合が非常に多い。日本では数%。今後この有機農業を推進するに当たって、この中では、小麦とか、畑作を挙げているが、草地に対する位置付けも教えてほしい。
  - ・食料生産と環境との問題をトレードオフから両方追求する時代になってきた。環境に負荷をかけないこと、これを100万ha(有機農業)にするという国の2050年の目標ですが、これでいくと年3万haぐらいのペースで、大変なこと。現実と目標との乖離が大きくて戸惑いは色々な方から聞いている。
  - ・環境に負荷をかけない、極端なことをいうと投入(肥料・農薬)を削減することだと思う。
  - ・投入を削減しても生産量を落とさないことが出来るのであればそれは望ましいし、投入を削減しても一定のアウトプットが得られ、農業生産額を維持できるのであれば、農業生産の効率が改善しているから、当然農家に歓迎されるはず。それが、それをやると収量が落ちてしまうところが、抜け切れていない。
  - ・有機農業に関する病気が出るというのは、技術が未確立であり、農業生産者が有機農業に取り組むのはなかなか難しい面がある。目標との乖離のとまどいはそういうところにある。
  - ・有機農業を普及するためには、どうしても技術革新に頼らざるを得ない。この技術を確立していくことが、具体的な戦略として打ち立てていかなければならないだろうと思う。
  - ・北海道が平成3年、1991年から取り組んできたクリーン農業。環境保全型農業の歩みを見ると、化学肥料、農薬、慣行農業に比べて30%、あるいは高度クリーンは50%削減することを目指して、頑張ってきた。そのために、地道な技術を開発してきた経緯がある。技術のみならず、YES!cleanマークの食品表示で、環境保全に配慮した食品であることを情報発信しており、北海道は、みどり戦略のやれることは全てやっているところがあって、ある意味ではプロトタイプが出来上がりつつあると思う。
  - ・農業試験場を中心にクリーン農業を支える技術を開発してきたことで、I P Mだったり、土づくりだったり、化学肥料あるいは農薬の使用量を減らしていく技術を地道に開発してきている。農業生産は、地域の気象条件に相当左右されるため、土づくりにしても、防除にしても、地域独自で農業技術を開発していかなければならないので、そうした役割は、北海道農業試験

場は持っていると思う。基本は技術を確立していくことで、クリーン農業を支える技術にチャレンジし続け、走り続けなければならないと思う。

- 投入を削減しても生産量を落とさない、マジックのようなもので、このマジックこそが技術開発であって、少し肥料が過剰じゃないかとか、リンが過剰じゃないかとか、そういったところの診断とか、肥料を投入して農薬を減らしても収量が減らないのであれば、耐病性であったり、耐虫性の品種を開発していくことが、本当に重要になってくると思う。
- 農薬を削減しても病気にかからない品種開発は、待ったなしのように思う。改めて地域の農業技術の開発に研究投資していくことの重要性を感じた。
- 消費者との関連で言えば、確かに安全・安心の重要性というか選択の基準を置くことで、消費者の行動変容だとか、今後キーワードになってくると思う。有機農業に対する消費者の行動変容を少し意識して取り組む必要があるのではないかと感じた。もともと有機農産物は、本当に有機かどうかわからない、経済学的に言うと消費者と生産者の間に情報の非対称があり、市場では取引してもらえない仕組みをもっている。そうしたところは、有機の基準ができていくことで解決されてきているが、有機農産物に対する意識が高いヨーロッパレベルに向かう、行動変容が必要ではないかと思う。だから、有機農業に取り組む生産者が経営を犠牲にしないような技術を開発していくことが、必要と改めて思った次第。

### (3) その他

- 特になし。

以上